

# N I E 授業実践案 3

平成19年7月18日(水)

研究主任 菊池 健一

1. 資料名: 5年道徳 『同じ空の下で』

2. 本時のねらい

世界の様々な国の人々とわたしたちの思いは同じであることを理解し、世界の人々が幸せにくらすためにはどんなことが必要か考えることができる。

学 習 活 動	指導上の留意点
1. 新聞記事特集を読んで心に残ったことを発表する。 ・毎日新聞特集資料 「輝きを失わないで 上中下」	記事を読んで考えたことを発表させる。 記事については朝の会の時間に読み、感想をまとめるようにさせておく。 世界の中には貧しくて働かなくてはならない子どもがいることをおさえさせる。 <div data-bbox="767 1021 1445 1189" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">「学校へ通えない子が他の国にはいるんだ。」 「僕たちより年下なのに働いているんだ。」 「とても疲れた表情をしているよ。」</div>
2. 副読本資料を読む。 ・教師の範読	<div data-bbox="204 1379 1278 1451" style="border: 3px double black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">外国の人と自分たちの「同じ」を探してみよう。</div>
3. 外国の人と自分たちの思いの違いについて考える。 ・たからもの ・悲しいとき ・友達について	ワークシートに書かせて発表させる。 外国の友達と自分たちの思いには差がないことに気づかせるようにする。 開発途上国の5歳未満児の死亡数について資料を見ながら確認するようにする。
4. 外国の方とどのような関わりをしていきたいかを考える。	自分たちも外国の方たちも気持ちは同じであることを想起させる。
5. 学習のまとめをする。	学習の感想を述べる。



貧困…児童労働にあえぐ



■上■

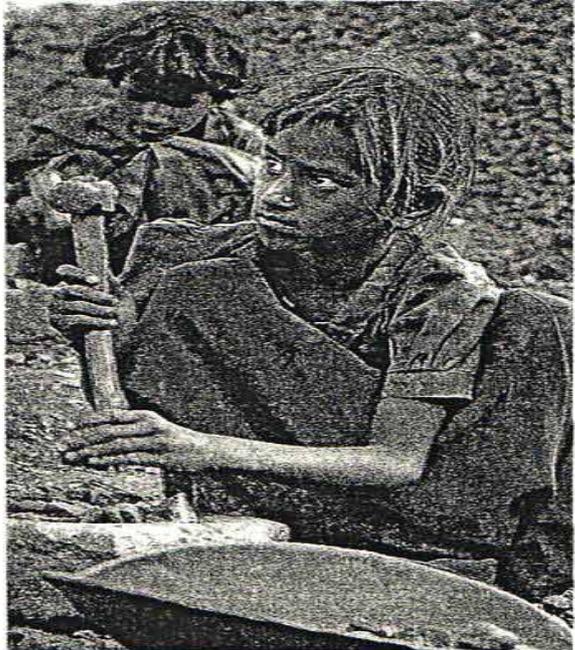
鉱石砕く少女たち

赤茶けた山で、同じ色に汚れた髪の姉妹が、無心にハンマーを振るい、鉱石を砕いていた。午前6時から午後6時まで、姉妹は父母とともに採石場で過す。仕事が休みになるのは、雨の日だけだ。鉄鉱石とマンガンを産出するインド南部のカルナータカ州サンドゥール。

ここにいた。幼い手に石をなじませてきたのだらう。リズムよく石を砕く姿には風格さえ漂う。学校には行かなかった。将来の夢を尋ねない。無言だった。そんなことを考えたことがない。

花に原産地表示はないが、日本が輸入するバラの半数がインド産だ。子どもたちがトゲで皮膚を傷つけて育てた花が、私

らしの裏側に、貧困ゆえの児童労働にあえぐ姉妹がいた。景色も人も赤茶けているのは、碎石時に出る粉塵が拡散してさびるせい。世界的な鉄需要の高まりで、山は活気づいた。デーワンマちゃん(9)とワリガンマちゃん(8)の姉妹は、4年前からこの労働は制限されている。

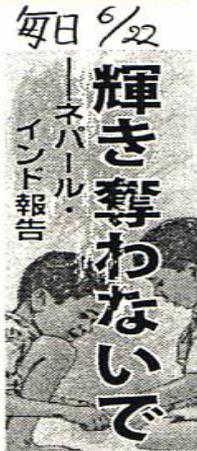
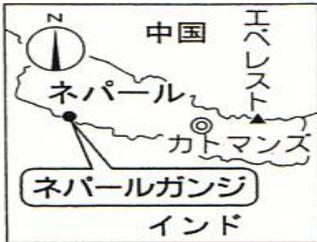


鉱山で鉄鉱石を砕く少女たち＝サンドゥールで

難民救援金を募集 災害や戦争、貧困などで苦しむ子どもたちを支援する「海外難民救援金」を募集しています。郵便振替か現金書留で送金いただくか、ご持参ください。〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1の1の1、毎日新聞東京社会事業団「海外難民救援金」係 (郵便振替00120-0-76498)



## 家の借金のかたに労働



■中■

家の借金のかたに、労働を強いられる子どもたちがいる。ネパール西部に地主から先祖の分も含めた債務を返済するために働く人々があり、「カマイヤ」と呼ばれる。多くはタルーという先住民族の出身だ。その家の子の多くは幼いころから、地主の家の奉公人や

小作人となり、未来には目をつむって生きていく。「1年の報酬は夫婦で米800<sup>キログラム</sup>。それでは足りず、地主から追加で米を借りたよ」。回国西部のネパールガンジ近郊のカマイヤが暮らす土地には、ろくに雨もしのげないわら小屋が並ぶ。ラル

さん(46)は早朝に起床し、日没まで地主の田んぼで小作をしていたが、働けども借財は増すばかりだった。仕事はかどらず、地主に銃で脅されたこともある。今に残る奴隷制度に見えた。

水道も電気もないわら小屋の一つに、アスマタちゃん(6)が母と弟妹の4人で住んでいた。小学校入学が近いが、元気がない。入学準備金60ルピー(約120円)が用意できない。母親(28)はとうしようもない」と目を伏せた。

地主の家で住み込みのメイドをしているベルジャさん(16)は、学校に行く時間以外は働きづめ

政府は00年に借財を無効にし、カマイヤを解放する政策を取り始めた。だが、小作仕事を捨てては暮らせず、この土地を離れられない人が多い。

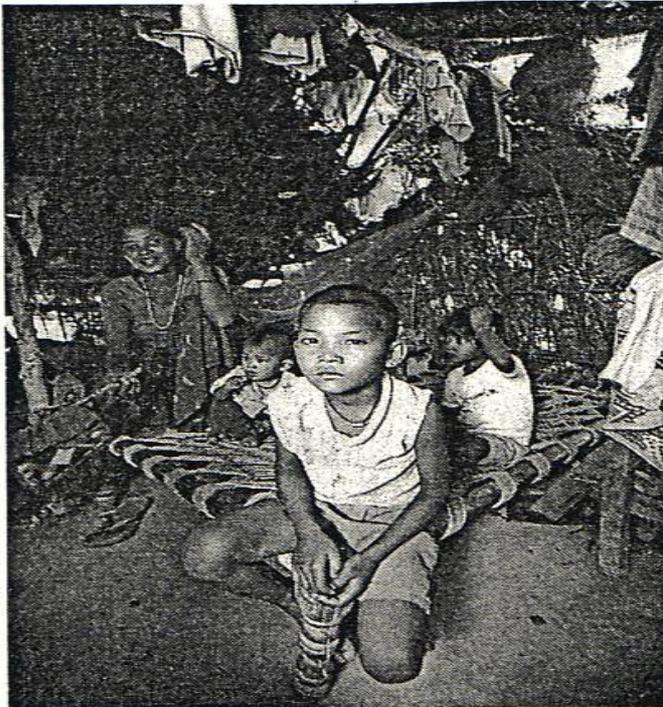
午前5時に起きて朝食の支度をし、昼食時間も地主の家に戻って仕事をし、学校も行けない。眠るのは台所だ。無給だ。両親は、地主の調査によると、カマイヤの子どもの就学率は5%だ。ベルジャさんに休みはあるのか聞くと、「休みの日にどこに行くというの?」と問い返した。

ベルジャさんは10年間、仕事を休んだことがないという。

## 休みなく無給10年

【文・石川隆宣、写真・西村剛】

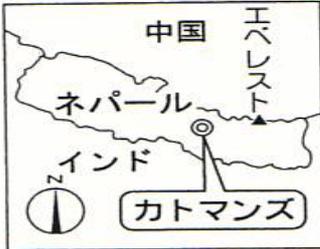
粗末な小屋で、家族と暮らすアスマタちゃん＝ネパールガンジ近郊で



粗末な小屋で、家族と暮らすアスマタちゃん＝ネパールガンジ近郊で



## 家出…希望より生活



ごみが散乱する夜明け、カトマンズの繁華街、タメル地区の路上。連なる高級レストランや土産物の軒先で、15人ほどの少年が体を折り重ねるようにして、眠りこけていた。夏を前にした季節とはいえ、ヒマラヤおろしの冷気が忍び込む。少年たちは体温を分け合っ

て暖をとるかのようについで、仲間の体間に手足を突っ込んでいた。「みんなで1日2000ルピー(約4000円)の少年が体を折り重ねるようにして、眠りこけていた。夏を前にした季節とはいえ、ヒマラヤおろしの冷気が忍び込む。少年たちは体温を分け合っ

る。最年少は12歳だ。ス二君は「父さんが酒に酔ってたくから、家を出てきた」。3年前のそれ以来、路上生活者となった。仲間も同様だ。ス二君の寝場所に接着剤が落ちていた。シンナーを吸っているらしい。注

南に約100キロ離れた



■下■

意すると、「自由がいいんだ」と開き直った。世界遺産であるカトマンズの旧王宮の近くに、ごみ集積場がある。異様な臭気が漂い、無数のサルラヒ郡の村から、2日前に来たばかりの少年(14)がいた。「村には食べ物もなかった。希望？生活できるだけでいい」と話した。顔に、表

## 物ごいごみ拾い集団

【文・石川隆宣、写真・西村剛】



ビルのひさしの下で、折り重なって眠る路上生活の子どもたち=カトマンズ・タメルで





